

伝統をふまえて未来へ

——序文にかえて——

坂 輪 宣 敬

法華経はインド、中国、日本の三国およびその周辺のアジア諸地域に広く伝播し、それぞれの地域の思想・文化の形成に多大な影響を与えてきた。法華経がこれら異質で複雑な諸地域の思想・文化の発展に、長期間にわたって寄与することができたのは、偏えに法華経の有する開会の精神によるものであろう。

この法華経および関連する社会と歴史の諸様相を客観的かつ総合的に研究する喫緊の時代の必要性に鑑み、立正大学に法華経文化研究所が設立されて本年は丁度四十年目の節目の年を迎えた。昭和四十一年六月の創設に際しては、立正大学当局をはじめ仏教学部の専任教員の方々の協力は云うまでもないが、当時仏教学部長であった初代所長坂本日深博士の熱意が、大きな原動力となったことは言を俟たないであろう。

発足した研究所は、日本を代表する法華経研究の中核となるべく、日蓮宗をはじめ法華経を信奉する新興教団にも協力をもとめ、立正大学を超えた大きなプロジェクトとして研究と財政の基盤を得るこ

とができた。その一方、一種の嵐のような熱意をもって資料蒐集活動をを行った。まず第一期の活動として明治以後の法華経文化に関する研究論文のうち、本学図書館に所蔵されないものを、大谷、京都、駒澤、関西、佛教、早稲田、立命館、龍谷各大学図書館や、東大寺、天理、成田各図書館、京都博物館や大英博物館などに協力をもとめて蒐集を行った。

資料蒐集活動は四十年の間倦むことなく、現在も続行されている。私が仏教学部助手に任用され、研究所資料部担当を命ぜられたのが昭和四十三年四月である。その頃は仏教学科のみならず、宗学科所属の所員、研究員の協力もえて行われてきた資料蒐集活動も一段落を迎えていた。しかしその余波の中で、叡山文庫等の出張に従事し、求法活動にも似た激しい資料の調査・蒐集活動の熱気を体験することができた。

研究所には総務部、研究部、資料部の三つの部門が設けられたが、研究部は蒐集された資料をもとに「ネパール本研究会」(現「法華

経梵本研究会)・「正法華経研究会」の二研究会を組織し(現在はこれに「法華思想研究会」・「法華経美術研究会」・「西域出土文献研究会」・「天台学研究会」が加わる)、研究活動を行ってきた。後の「活動報告」に記載する『梵文法華経写本集成』I-XIIはそれら研究会の活動の成果である。発足当初の研究会には当時の一流の碩学の方々が近しく席を連ね、咳き一つも憚られるような緊張した雰囲気の中で、研究がすすめられてきた。

そうした四十年の活動をふり返るとき、道未だ半ばし、という思いが強い。ご懇篤な教導をいただいた初代所長の坂本博士も遷化されて三十三回忌が過ぎ、多くの顧問、所員、研究員の方々も遷化され、没くなられ、あるいは定年を迎えるなどして研究所を去って行かれた。

さて当研究所では初代所長の功績を称えて、お名前を冠した「坂本日深学術賞」を創設し、「活動報告」に示すように、毎年前年度の法華経に関する著書・論文を対象に選考を行ってきた。平成十二年度は田島毓堂氏の『法華経為字和訓の研究』が選ばれた。この授賞はそれまでと異なって法華経の文化面での授賞ということ、いわば画期的であった。そして平成十八年度には野沢勝夫氏の『「仮名書き法華経」研究序説』が受賞した。

法華経の文化面での研究では、当研究所の資料部長を長く勤められた故兜木正亨博士の遺稿を編集した『兜木正亨著作集』三卷(昭

和五十七年六月)があるが、さらに古くは故中村瑞隆所長が、本学史学科考古学研究室と共同で行った、ネパール国テイラウラコット遺跡の発掘調査が、重要な学的成果を形成している。これからの研究分野として、中村瑞隆博士が道を拓かれた、法華経文化の調査・研究の未踏の学問の世界もまた、注目されるのではなからうか。

研究所設立の趣旨に「法華経の学的進歩発展に寄与し、併せて法華経の精神を内外に顕揚し、もって世界の文化と平和に貢献せんと念願する」とあるが、その掲げられた目的に向って、法華経の思想、歴史、文化の各方面にわたって四十一年以降も着実に歩みを進め、日本のみならず世界の法華経研究の中心となることを、衷心より希念するものである。

末筆ながら本日まで本研究所にさまざまな形でご援助、ご支援、ご協力下さった各位に対し、また本記念号にご祝辞をたまわった原實博士、田賀龍彦博士に対し、また貴重なご高論をご寄稿下さった研究者の方々に、心より厚く御礼申し上げる次第である。

平成十九年三月二十日

立正大学法華経文化研究所長